

紙パルプを取りまく問題を聞く

語る人 山陽国策パルプ株式会社山林事業部北海道山林部

部長 岡本丈夫

聞く人 北海道林産技術普及協会

常任理事 小野寺重男

好調な経常利益の背景

……昨年の好調な背景について伺いたい。

日本経済新聞などでまとめられている大手8社（そのうち3社は北海道に工場を持っていませんが）の3月期の経常利益見込みは850億円近く出ています。このうちで一番大きく収益に寄与したのは、昨年1年で1キロリットル当たり1万円下がった重油価格で、全体の利益のなかの30%弱になります。

つぎに輸入チップ値下がりによる原価削減効果、これは特に針葉樹系統を使っているところ、北米チップがBD当たり28ドルほど値下がりして10%程度寄与している。

もう一つは金融収入の改善、それぞれ設備投資のため借入金も多いですからね、公定歩合の下がったことも助かりました。これも輸入チップと同じ位の効果をもたらしていると思われます。

私の工場でも重油ボイラー1基を石炭に転換しておりますが、この様な省エネ・合理化の効果もあります。また、昨年は、57年対比で生産が約5.7%増えており、出荷も5%程度増え、両方とも過去最高となっておりますが、この増産・増販効果があると思います。

ただここで考えねばならぬことは、従来の増益パターンは原料費などの値上げを増産・増販あるいは値上げ修正で吸収していたが、今回の場合は（自助努力による経営合理化も見逃がせませんが）ガイドライン操業による市況安定と原料、燃料の大額な値下がりによるものです。

……外的要因が大きいと言うことですね。

そう思わざるを得ません。



58年度の原木需給状況

……昨年の原料事情は、安定して集荷出来たということになりますか。

針葉樹については風倒木処理の最終年次にあたっていたこと、比較的在庫もありましたので安定していましたと思います。

58年度の道内の原木使用総量722万m³で、57年度対比13万m³増（国内材20万m³増、外材7万m³減）、集荷量は704万m³で前年対比9万m³増（国内材24万m³増、外材15万m³減）で、外材から国内材への転換をチップ工場の在庫あるいは国有林の山元の材などをにらんで、各社が国内材を優先する姿勢を出しています。また、貯材は90万m³で18万m³減（国内材5万m³減、外材13万m³減）となっています。

針葉樹は、国有林の基準価格も上がっておりませんが、昨年の夏場から大きく変わったのは広葉樹です。

……たしか基準価格も9月に改訂になりましたね。

広葉樹一般用材が昨年春から様変わりしましたので、従来パルプに向かっていた材まで用材に移行したと言えるのではないでしょうか。

58年度広葉樹材の動向

広葉樹だけ見ますと大幅でして、58年度使用量は375万m³で、前年対比23万m³増（国内材11万m³



増、外材12万m³増）、集荷量は375万m³（国内材、外材ともに16万m³増）、貯材は28万m³で前年対比±0（国内材2万m³減、外材2万

m³増）の状況になっております。

……原料集荷の道内での地域差は。

本質的には変わらないが、道内の広葉樹パルプ材の集荷量が240～250万m³の線で紙パ各社が従来のシェアを守っているのであればバランスさせてゆけると思います。昨年は270万m³といわゆる危機ライン近くになってしまいました。

56、57年は、カルテルなどで生産が大幅に落ちたので、外材も国内材も調整せざるを得なかったのが実情ですが、国内材は安定、優先してとるという姿勢で、調整には使いたくないというのが私共の気持ちです。

……円高の関係で輸入の影響はないのでしょうか。

円高は短期的にみると輸入チップや重油の値下がりをもたらし、紙パルプにとって良いことですが、長期的にはパルプの価格が押さえられています。紙製品の輸入が増加する心配があるので歓迎できません。紙パルプにとって円はほどほどの位置にあって欲しいのが本音でしょう。

原木・チップ価格への対応

……原木・チップの値上げを望んでいると思うがそれへの対応は。

基準価格に従って早い遅いの時期の問題はありますしあが、各社とも対応していると思われます。また、各社ともチップ工場の原木在庫や生産量など、内部まで立ち入って色々と指導、協力し合っていると思うのですが。

カラマツへの対応

……カラマツの使用量について伺いたい。

各社とも増加しております。これは国や道の方針に従い、これらが安定出荷されるという資源背景、風倒木の発生などで、競合するダグラスファー

より収率や品質は劣るもの、価格が安いということで使用しています。

その使用量は、55年を100として58年は36%増、従来48万m³が58年度には66万m³、59年度はまだ伸びるでしょう。その分だけ外材が減ってきています。

針葉樹系の外材依存度は70%近くありましたが、58年度には53%まで落ちている。

……こちらの工場では、どれ位使っておりますか。

旭川工場だけで昨年度の使用量は約15万m³です。

……他の樹種に混合して使うのですか。

従来、エゾマツ・トドマツにカラマツとダグラスファーを混ぜて使っていましたが、ダグラスファーを全面的に中止してカラマツに変えました。それに対応して造る製品も一部カラマツに合わせて変えています。

各社それぞれ苦労してカラマツに対応しており、極端に値段が上がってしまうと、またカラマツ離れがおきるのではないかと心配しています。生産者も使う方も折り合える所はどこかを模索してゆかねばなりません。

故紙の再利用

……最近の故紙の利用状況は。

北海道で昭和45年、チップ換算31万2千m³（故紙1トンを3m³として）10万トンが、昭和58年には260万m³と8倍になっています。これも外材依存度が落ちた要因にもなっています。全国の故紙の回収率も前年対比で1%伸び49.1%と言われております。

59年度の原木需給計画

総使用量は720万m³で前年対比2万m³減（国内材14万m³減、外材12万m³増）、集荷量は前年対比11万m³増（国内材9万m³減、外材20万m³増）、貯材は前年対比5万m³減（外材のみ5万m³減）となっています。

広葉樹は、道内のL材をパルプ会社が刺激してはいけないので、全体の使用量は375万m³（国内材250万m³、外材125万m³）で変わらないが、外

ウッディ エイジ

材19万m³ 増となっている。集荷量も 380万m³ で前年対比5万m³増（国内材15万m³ 減、外材20万m³増），貯材は前年対比5.5万m³増（国内材1万m³増、外材4万m³増）となっている。Lチップ 250万m³のうち背板が50万m³位でしょう。

……Lチップ専門工場が 200位ありますから1工場1万m³になりますね。

昨年と比べ19万m³使用減になりますが、これは広葉樹全体の需給バランスを配慮したことです。

紙・パルプの輸入状況

紙・板紙の輸入量は、総生産量の4%で高くはないが、ただ特定品種はだんだん高くなってきていている。クラフトライナー、クラフト紙・新聞用紙などの特定品種の輸入比率は10%位までになっており、伸び率は57年と58年対比で新聞紙が3.4%、コート紙で21.4%の大幅な伸び、クラフト紙も12.5%となっています。ダンボール原紙の伸び率は0.5%になっておりますが、これは国内の価格が低迷して、従来台湾、韓国から入っていたものの輸入メリットが無くなってきたので落ちていますが、北米、カナダから入っているものは確実に伸びております。

その他、北欧から若干の紙・パルプが入っておりますし、外国企業と2、3の工場がタイアップして現地生産するものが入る可能性があります。

従来は、関税や複雑な流通機構などによってガードされてきたが、段々くずれてきており、その前に我々がそれなりの国際競争力をつけねばなりません。現に、カナダは新聞用紙生産量の70%をアメリカへ輸出していたが、最近アメリカでも西海岸から南部に近代化された設備をもつ会社を新・増設しており、輸入も50%台に落ちると思うので、カナダで余る20%が日本に向かった場合は大きな問題となる。貿易交渉も農産物の次には、木材、紙製品ではないかと懸念されます。

紙製品の市況

……紙の最近の市況はどうですか。

毎週月曜日に日本経済新聞に商品市況が出てい

ます。指標になるのが上質紙で、57年9月、カルテル後に201円50銭をつけたが、10、11、12月と下がり、58年1月から193円50銭になり、これが続いている。これは通産省のガイドラインという需給管理体制で市況の安定がはかれているが、紙の需要が堅調でなぜ価格が弱含み、横ばいなのか、これは潜在的に過剰設備能力をかかえていて、その供給過多構造が一向に改善されていないことがあります。

花形商品と言われるコート紙も57年9月に225円50銭が最高で下がっており、荷動きが活発なのに価格が上がらないのはコート紙の増設ブームによります。クラフトライナーも55年9月までは業界協調の鏡と言われ139円という高い水準を保っていたが、その後乱れに乱れて58年7月に105円まで落ち、その後構造改善、設備廃棄の話し合いが進むなかで昨年9月に114円50銭に値もどして、この冬の不需要期をのり切って少し価格を値もどしたいと考えているようですが、まだ横ばいの状況にある。その上、故紙の値上がりも若干あり、これらも苦しい場面が考えられる。

新聞は、一般の紙がカルテルを結んでいる時も比較的高い水準で生産が続いているが、これは常に外材を横にらみで見ており、外国との競争になりますので極端な値上げは出来ません。紙も段々針葉樹製材と同じような状況になりましたよ。

中・長期の課題

……紙・パルプの今後の中・長期の課題は。

紙・パルプは、現在取り組んでいる構造改善の問題もありますが、産構審の答申にも出ているように課題は2つあり、長期的な原材料の確保と国際競争力になりましょう。本年2月の日米紙パ会議で関税問題が提起されると思っていたが、アメリカの市況が良いので、ドギつく出でないが、一転して市況が悪くなると、アメリカの製品輸出拡大指向と原料問題とからめて出てくる





でしょう。数年前に「紙の消える日」という本が出ていますが、一読の必要があると思います。そういう事態がおきないとは言い切れないのでしょう。

関税、非関税障壁とか、日本の複雑な流通機構だけで製品輸入をガードするのは限度があり、本質的に安くて良いものにはかなわないと思います。

国際競争力をつけてゆくには、設備とか技術など、川下の技術革新はある程度進んでいる。ただ、川上にさかのぼるほど遅れている。伐木、造材なども遅れている。よく言われるよう、手ノコがチェンソーに変わり、馬がトラクターに変わっただけではないかと、国際競争力をつけるには近代化が必要でしょう。

川上の近代化

……川上の近代化をもう少し具体的に。

アメリカやカナダとの比較で言わせてもらうと、北海道といえどもあちらに比べて山は険わしいし、林道も狭い、とてもトレーラー、トラックなど入りません。伐採面積も非常に小さい、当然伐採コストは高くなる。このようなところに思い切った設備投資も出来ないでしが、国際競争力をつけるには、伐採技術の革新、これは林道あるいは販売の形態を含めて革新が必要なのではないでしょうか。

内陸工場の生きる道

……こちらの工場は内陸工場という特殊事情があると思うが問題点は。

当社は内陸工場で国産材のみが主対象ですから、量の拡大は望むべくもないでしが、ただ、外材でも良いものがあるかも知れませんが、北海道のL材は紙にしても品質的に良い特性があるのでそれを生かすようにしています。当工場は設備は古いがそれなりの合理化をおこなっております。今

から20年前は1,200名を超す要員が居りましたが、今は我々集荷部門の人間も含めて900名弱の人数になっています。それでも工場の生産量は数倍になっています。このように内部の合理化も行っていますが、あくまでも当工場は、ユーザーのニーズに合わせた少量・多品種、高付加価値の特徴ある製品を抄いて生きのびる以外にないでしが。

紙・パルプの構造改善

……道内のチップ工場数も増えて構造改善が必要という方もいるようだが。

紙関係では、洋紙は既に合意がなりまして、61年9月までに現有能力の10%見当、年産量86万トンにあたる機械・設備を廃棄、ダンボール原紙も62年6月までに約20%，年産153万トンに相当する設備を廃棄又は吸収することになった。

規模を小さくすることは国際競争力を無くすることになり、反対する企業もあり、もっともな意見であるが、その前に業界が大量生産をやって価格を乱すのは問題であり、納得されたようです。

ですから、経済性のない設備も縮少し、同時に原材料、エネルギーコストの低減、あるいは原料・燃料の転換、前述の吸収・合併・提携などを行って活性化してゆかねばなりません。

口で言るのは簡単ですが、片方で縮少し一方で活性化を同時に進行させるのですから、今後色々と難しい問題が多いでしが、業界同志でよく話し合いながら、それを進めてゆかねばならないと思います。

……北海道の木材消費量の約半分は紙・パルプであります、その価格は本道の木材業界にとって影響するところが大きいと思われます。したがって、今後の紙・パルプ製品の市況がなるべく明るい方向に進んで欲しいと期待しながら、今日のお話しを終らせていただきます。